

助動詞ダロウのアノテーションとそのガイドライン

宮岡大・内野宮美月・芳賀湧・吉野雅耶・井上美由紀・立山芽衣・前野一喜・
山本菜月・楊佳銘 (以上、九州大学文学部) ・上山あゆみ (九州大学人文科学研究院)

1. はじめに

ダロウという語は、森山 (1992) や金水 (1992) 等において、推量や確認要求の意を表すとされるが、実際の用法は多岐にわたる。コーパスによる検索の有用性を高めるためには、これらの用法の違いがアノテーションによって適切に区別されていることが望ましい。そのために、川添ほか (2011)、田中ほか (2012)、宇津木ほか (2014) 等で主張されてきたように、必要に応じて言語学的テストを行い、分類のガイドラインを作成することが必要である。

本発表では、助動詞ダロウの様々な用法について分類ガイドラインを作成し、それにあたって、どのような困難な点があったかを明らかにした上で、実際にアノテーションを試みた結果を述べる。

2. ダロウの分類ガイドライン

まずここで、提案するガイドラインを示し、それぞれの分類について、代表的な例文と問題になりうる点を順に述べる。

※ 以下の「ダロウ」は、全て「デショウ」に置き換えられる

※ []内は省略できる。また「…」は任意の語が当てはまる

| | | |
|---|----|---|
| A | 譲歩 | ● 「名詞(句) /形容動词语幹」 + ダロウ + 「が/と」 |
| B | 感動 | ● 「なんと(て)」 + 「…」 + 「形容詞/形容動詞」 + 「の/ん」 + ダロウ[か] ● 「なんと(て)/なんと(て)いう」 + 「…」 + 「形容詞/形容動詞」 + 「名詞(句)」 + 「[なの/なん] |

| | | |
|---|----|--|
| | | +ダロウ[か] ● 「どんなに/どれほど/どれだけ/どれ(どの)くらい」 + 「形容詞/形容動詞」 + 「…」 + ダロウ[か] |
| C | 提案 | ● 「動詞」 + 「…」 + 「いい/よい」 + ダロウ ● 「動詞/名詞(句)」 + 「…」 + 「いかが/どう」 + ダロウ[か] ● 「動詞/名詞(句)」 + 「…」 + 「いいのではない」 + ダロウか ● 「では(じゃ)ない」 + 「[の/ん]」 + ダロウか |
| D | 質問 | 何, 誰, いつ 等の疑問詞がある、または「ダロウか」「ダロウ?」の形式のもの 話し手が応答を求めている場合 |
| E | 自問 | 何, 誰, いつ 等の疑問詞がある、または「ダロウか」「ダロウ?」の形式のもの 話し手が応答を求めている場合 |
| F | 確認 | 疑問詞などの疑問形式がない 話し手が応答を求めている場合 |
| G | 推量 | 上述の分類 A~F に当てはまらないもの 話し手が応答を求めている場合 |

3. 代表的な例文と問題になりうる点

3.1. 「A : 譲歩」について

「A : 譲歩」の代表的な例文は、次に示す通りである。

- (1) a. 小学生だろうと遊ぶ人は遊んでいまずからね。
b. 不安穏だろうが、ありのままの中に自分の思いを置く。

キャアコップチャイ (2009) で、「N だろうが、N だろうが」という形式として言及されているも

のである。「Xでも、Yでも関係なく、だれでも（何でも）」の意味をもっているとされる。この点において、後述する分類D～Gとは異なる意味であると考察し、「A：譲歩」という分類を設定している。

キャアコップチャイ (2009) において、この分類のダロウは、名詞しか前接しないとされているが、(1b)のように、形容動詞語幹も前接しうる（なおここでは、橋本 (1935) の立場をとり、形容動詞という品詞を認め、その終止形から活用語尾「だ」を除いた部分を語幹とする）。

「ダロウが」の形式は、(2)のように、「ダロウと」に置き換えたとき、文意が変わらないものは「譲歩」であり、文意が変わるものは「譲歩」に分類されない。

- (2) 不安穏だらうと、ありのままの中に自分の思いを置く。

また(1a)のように、「ダロウと」の形式も「譲歩」に分類されるが、(3)のように、ダロウの後に読点（、）を挿入することができる、ダロウまでが引用節である場合は、「譲歩」ではない。

- (3) a. あの子は小学生だらうと言った。
b. あの子は小学生だらう、と言った。

3.2. 「B：感動」について

「B：感動」の代表的な例文は、次に示す通りである。

- (4) a. なんという喜びでしょう。
b. 何てかっこいいんだらうと思った。
c. どんなに辛かったことだらう。

笹井 (2006) は、感動文の「ダロウ」は「ダ」とともに、推量や断定という意味がいわば無化されており、判断辞としては機能していないとしている。従って、(4)の「ダロウ」を、(5)のように「ダ」と置き換えても、意味は変化しない。この点において、後述する分類D～Gとは異なることを考察し、「感動」という分類を設定した。

- (5) a. なんという喜びだ。
b. 何てかっこいいんだと思った。
c. どんなに辛かったことだ。

また「どんなに」を除く、「どれほど/どれだけ/どれくらい/どのくらい/どのくらい」の形式のものは、後述する「D：質問」や「E：自問」に分類される場合がある（これは、山口 (1990) で指摘されている、疑問表現と感動表現のつながりによるものである）。

- (6) 大仏は{どれほど/どれだけ/どれくらい/どのくらい}大きいのだらう。

(6)のような場合、「どれほど/どれだけ/どれくらい/どのくらい」を、「どんなに」に置き換えても文意が変わらないかどうかを判断し、変わらないならば「B：感動」に分類する。

なお、安達 (2002) や笹井 (2006) は、感動文の周辺に位置する詠嘆文で、(4c)のように、文末に「こと」を伴っている表現は、感動文的な側面を持つようになると指摘している。これを踏まえると、(6)のような場合において、ダロウの直前に名詞や準体助詞がないとき、ダロウの直前に名詞「こと」を挿入できるならば、「B：感動」に分類できる。

3.3. 「C：提案」について

「C：提案」の代表的な例文は、次に示す通りである。

- (7) a. フルーツをこんもり盛るのもいいでしょう。
b. ご覧になってはいかがでしょうか。
c. 一人一人がゴミを減らせばいいのではないだらうか。
d. 人間に抱く感情も同じではないだらうか。

(7a,b)のように、相手に行動を提案する場合、または(7c,d)のように、問題を提起する場合は、「C：提案」に当てはまる。

キャアコップチャイ (2010) などの先行研究において、このような用法は言及されていないが、(7)はどれも、ダロウに前接する命題に対して話し手の確信度が高く、聞き手に意見を投げかけているという点において、後述する分類D～Gとは異なる意味であると考察し、「C：提案」という分

類を設定することとした。

3.4. 「D：質問」について

「D：質問」の代表的な例文は、次に示す通りである。

- (8) a. これは私でもできるような難易度で
しょうか。
b. 次は何をすればいいでしょうか。

これ以下の分類D～Gは、同じくダロウを考察している宮崎 (1993) に倣い、聞き手の存在を前提としているか否かによって分けられる、「独話モード」と「対話モード」という二つの発話モードを考える。

この「D：質問」は疑問詞がある、または「ダロウか」「ダロウ？」の形式のものである。「質問」は対話モードであり、話し手が応答を求めている場合である。

3.5. 「E：自問」について

「E：自問」の代表的な例文は、次に示す通りである。

- (9) a. なんで婆さんや子供にばかりもて
るんだらう。
b. お金があれば幸せになれるのだらう
か。

「自問」は、自分自身に問いかけることを表す。疑問詞がある、または「ダロウか」「ダロウ？」の形式のもので、話し手が応答を求めている場合である。発話モードとしては、独話モードが基本であるが、対話モードでも可能である。

キャアコップチャイ (2010) は、以上のような条件に当てはまる用法を「疑念用法」とし、さらに「自問」「反語」「断定回避」と細分化されるとする ((10a)は自問、(10b)は反語、(10c)は断定回避の例である)。

- (10) a. 全体重がスライドする浮遊感、何年
ぶりだらう。
b. 職場に関してわがままを言ってもい
いものだらうか。(いやよくない)
c. 君はもっと努力すべきだらう。

(10b)のような文が「自問」か「反語」かは、聞き手によって受け取り方が大きく異なり、区別が困難であった。また(10c)では、「君はもっと努力すべきである」ということに確信を持ってはいるものの、相手との関係上、断定することを差し控えようとしたことからダロウを用いているため、「断定回避」に分類されるとする。しかしこの分類は、後述する「G：推量」との区別が困難であった。

従って、「自問」と「反語」を合わせて「E：自問」という分類を設定し、「断定回避」は「G：推量」に含むこととした。

3.6. 「F：確認」について

「F：確認」の代表的な例文は、次に示す通りである。

- (11) a. 君は行ってしまいたいんだらう、俺を
残して。
b. 静かな店でしょ、ここは。
c. 知らない人が出入りするの、あん
ただって嫌でしょう。

「F：確認」は、聞き手に対する確認、気付かせ、押し付けを表す。対話モードであり、話し手が応答を求めている場合である。

会話の場合、話し手が聞き手に対して応答を求めることが基本であるため、この「確認」のダロウが多い。

また「確認」のダロウは(11a,b)のように、「ダロ」「デショ」という形式であることが多い。

3.7. 「G：推量」について

「G：推量」の代表的な例文は、次に示す通りである。

- (12) a. 凍傷を起こし、死に至るだらう。
b. 充分稼いだでしょうし、ずっと印税
が入ってくる。

上述の分類A～F以外のものが、「G：推量」に分類される。独話モードでも対話モードでも可能であるが、話し手が応答を求めている場合である。

「譲歩」に分類されるものを除き、接続詞が後続する「ダロウ」は、全てこの「推量」である。

3.8. 分類D~Gの区別

分類D~Gの分類方法は、簡潔にすると下図のように整理できる。

| | | 疑問形式 (疑問詞/「か」/?) | |
|--------------------|-----|---------------------|---------|
| | | ある | ない |
| 話し手が 応答を 求めて | いる | D 質問 | F 確認 |
| | いない | E 自問 | G 推量 |

4. アノテーション結果

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から、ダロウを含んだ例文500件(内訳は、PBから250件、OCから250件)を抽出し、上記の分類ガイドラインにしたがって、実際にアノテーションを行った。

ガイドライン設計者1人と九州大学文学部の学生1人がそれぞれアノテーションを行い、その結果からカッパ値を算出したところ、0.853となった。

アノテータ間でぶれの少ない、ある程度信頼性のあるガイドラインが作成できたことになる。今後、ずれの見られるところを中心に、更に検討を重ねていきたい。

参考文献

安達太郎 (2002) 「現代日本語の感嘆文をめぐって」『県立広島女子大学国際文化学部紀要』10: 107-121.

橋本進吉 (1935) 「國語の形容動詞について」『藤岡博士功績記念論文集』1: 389-421.

川添愛・齊藤学・片岡喜代子・崔榮殊・戸次大介 (2011) 「言語情報の確実性に影響する表現およびそのスコープのためのアノテーションガイドライン Ver.2.4」, Technical Report

of Department of Information Science, Ochanomizu University, OCHA-IS 10-4.

キャアコップチャイ, スィラッサナン (2010)

「「だろウ」の意味・用法—小説における分析」『日本語/日本語教育研究』1: 157-176.

キャアコップチャイ, ソムピット (2009) 「「だろウ」の意味・用法」『学習院大学大学院日本語日本文学』5: 82-95.

金水敏 (1992) 「談話管理理論からみた「だろウ」」『神戸大学文学部紀要』19: 41-59.

宮崎和人 (1993) 「「~ダロウ」の談話機能について」『国語学』175: 40-53.

森山卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101: 64-81.

笹井香 (2006) 「現代語の感動文の構造—「なんと」型感動文の構造をめぐって—」『日本語の研究』2(1): 16-31.

田中リベカ・小池恵里子・戸次大介・川添愛 (2012) 「言語学的テストに基づく意味アノテーションのガイドライン設計—確実性判断に関わる表現を中心に—」『言語処理学会第18回年次大会発表論文集』401-404.

宇津木舞香・佐藤未歩・青木花純・田中リベカ・川添愛・戸次大介 (2014) 「MCN コーパスにおける形式名詞「はず」「わけ」「つもり」のアノテーション」『言語処理学会第20回年次大会発表論文集』1067-1070.

山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』明治書院.